

公証役場事務長逮捕監禁致死事件被害者遺族 假谷 実さんの手記

私は、1995年2月、オウム真理教に殺された、目黒公証役場事務長假谷清志の長男です。父の妹、私からすると叔母は、新聞の折り込み広告で、SSAというヨガ教室を知り、同教室に通っていましたが、元々叔母は、占いか、健康食品やマッサージなどが好きでしたので、私たち家族は、叔母がオウム真理教と関係があるなど思ってもいませんでした。

1994年夏頃、亀戸の自宅を訪れた叔母が、「体に良いことをやっている。この本を読んでみて」と言って本を置いていきました。背表紙を見ると発行者はオウム出版となっていました。時期を同じくして、父も、「妹が変なものに関わっており、相当なお金をつぎ込んでいるようだ。関わっている相手は、オウムじゃないか」と言い始めました。

オウム真理教といえば、当時、その仕業であるとは特定されていなかったものの、反オウムの活動をしていた坂本弁護士一家が突如失踪した事件も既に起きており、事件とオウム真理教との関係が取り沙汰されていましたし、私の自宅近くにあったオウム真理教の亀戸道場周辺では、異臭騒ぎも起きて、町内会でも、オウム真理教への反対運動や立ち退きを求める署名活動も始まっているような状況でした。

そうした中で年が明け、1995年2月25日の土曜日、自宅に帰ると、叔母が来ており、今までの経緯を話してくれました。この時私は、初めて、叔母がオウム真理教に入信していることと、オウム真理教に6,000万円以上ものお布施をしていたことを知りました。

その時の叔母は、出家するために、当時、港区青山にあったオウム真理教の青山道場へ頻繁に通っていましたが、出家に伴って全財産をお布施しなくてはならないことを知って困っていたため、忘れ物を取りに行くなどと何らかの理由を付けて道場から抜け出て、父に相談しに来たということでした。叔母は、お世話になった人へのお礼や墓守の費用として、自分の財産を少しは残しておきたいと思っており、オウム真理教に全財産をやるつもりはなかったのだそうです。

2月27日の月曜日、父と今後のことについて電話でやり取りをした時、「今、公証役場の外にオウム真理教の関係者らしき人物がいる。この電話も盗聴されているかもしれないので、余り詳しくは話せない」と言っていました。自宅に帰ると、「マハーポーシャ」などと書かれた名刺と、父が書いたメモを見せられました。そして、父は「今日、オウムに尾行された」と言いました。父はこの日、昼食を兼ねて公証役場を出た際、誰かに尾行されていることに気が付いたようです。父の書いたメモの内容は、「万が一のことがあったら警察に連絡しろ。オウムに間違いない」と書いてありましたが、便せん

公証役場事務長逮捕監禁致死事件被害者遺族 假谷 実さんの手記

書かれた父の文字は乱れていて、おびえていた様子が伝わってくるものでした。

父が拉致された事件のあった1995年2月28日の火曜日、午後4時30分くらいに、妻から、「お父さんが連れていかれちゃった」と電話がかかってきて、頭が真っ白になりました。その後は、誘拐事件という扱いで、自宅の電話に録音機がセットされ、警察官による24時間警備が敷かれていました。こうした状況下で、父は恐らく生きては帰って来ることができないだろうと覚悟を決めていました。

1995年5月くらいからであったと思いますが、複数の証言によって、父が既に死んでいるということが明らかになってきました。そして、1995年7月に入って、警視庁捜査一課の管理官から、「複数の証言から、假谷さんは、既に亡くなったものと思われまます」と正式に言われました。しかし、遺体も遺骨も見えていないので、私の気持ちが落ち着くことはなく、父の死を全て受け入れられたかといったら、そうではなかったです。

坂本弁護士一家殺害、松本サリン事件、地下鉄サリン事件など罪のない多くの方々を殺傷したテロ集団が、今も名前を変えただけで存続していることは許しがたいとともに、その存在を恐ろしく感じています。また、被害者への賠償責任についても、最高裁判決が確定しているにもかかわらず、支払わずに資産を隠して公安調査庁へ報告することも許しがたいです。観察処分の継続とともに、賠償責任の遂行を強く求めます。

(2024年9月記)